

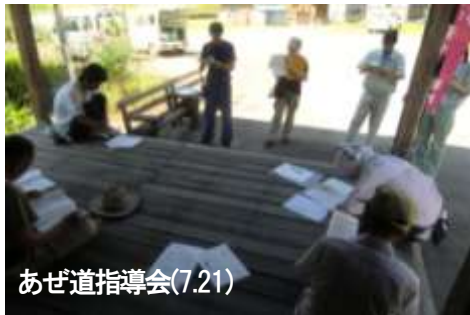
山桜の里 戸赤



水田転作現地確認(7.8)



花植えを終え記念の一枚(6-26)



あぜ道指導会(7.21)

戸赤老人会

気持ちに通じる
安心笑顔



オーナー一行のソバ播き(7.25)

川が変わる



膨らんできたサヤ

花豆栽培

ぜい。実入りの少ない株ができるのはな
というのはいつもの実感。



川の流れは変わり元の流れのところが道となる

れきのひとコマ

2015/07/26 10:30

【木地の学習No.57】原木の半分位まで切り込んでから、ノコギリで切り落とす。ノコギリがなかった時代は、ヨキだけで切り落としていたようである。次に、トーナツ状になった木片をワリナタで椀の高さの寸法に合わせて割り、カタブチしやすいように角を落としておく。ブンギリで取ったアラガタは、椀が柾目にとれるので乾燥しても狂いが少なく、加工がしやすかったばかりでなく、木くずが出る割合が少なく、効率のよい木取りの方法であった。以上二種類の木取りのうち、前者のムキドリは、トチの木をカタにするときに適した方法である。トチの木は芯に近いほうが赤身が広がっており、表皮に近いほうが白身がある。トチの赤身は割れやすく、しかも狂いやすいので、赤身をさけるように木取りをしなければならない。芯を残して表皮のまわりをムキドリする方法は、これに適している。しかもトチの場合は、板目で取っていくのが一般的な方法である。理由はまだわからないが、針生の畑小屋ではこの方法をブナの木に対しても行ってきたわけである。一方木地椀を柾目、柾目と取っていくブンギリによる方法は、ブナの木に適しているといえる。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (つづく)

ふくしまっ子受入の
打合せ(7.17)



ことしの「ふくしまっ子」は今のところ、9回のべ177人。このほか一般客のご利用も受け入れ。

自然がおもてなしのステーション

自然探索大冒険で戸石の向山を案内



人が人のつながりをつくる

やまざくらの
自然体験



学校前は工事中なので、村の下手の方が今年の遊び場。村の上下流どこも危なくない川に人気が広まる



キャンプファイヤーの焚き木集めも今後の課題

今、最盛期

毎年恒例の軽音楽グループ、ワラを燃やしてカツオのたたきを作るなどこだわり料理も満喫



60人近くの食事はさすがに大変、スタッフのみなさん本当にお疲れ様



煉りの工程が大事なソバ打ち

(ストーリー性のある村づくりのために[No.26]・下郷町史 的場遺跡からは晩期末葉の大型の柱穴が検出されており、特殊な大型のトーテンポールの存在が推測され、既に宗教的儀式を行っていたようである。当時の人々が日々の食料獲得のみの生活ではなく、精神的に余裕のあったことがわかる。ただし縄文時代は環境の変化には弱く、常に飢餓の不安を抱える社会でもあった。数千年も経た縄文時代の生活用品や食料は温暖多湿の環境のため腐ってしまい、現在まで残ることは稀である。このような理由で本町の遺跡では植物遺体は発見されていない。ところがその残りにくい植物質の遺物を豊富に出土する三島町荒屋敷遺跡は、福島県下で始めてのものである。荒屋敷遺跡は遠賀川系畿内第Ⅰ様式の壺と多数の木製品を出土した縄文後期・晩期から弥生時代の遺跡であり、湧水が豊富な環境であることと、河川の氾濫によって比較的短時間に埋没したことが幸いして縄類や漆製品・編布(アンギン)など多くの植物製品と共に木弓・石斧柄・木製浅鉢未製品・權伏木製品などが出土しており、当時の生活を復元することができる。またトチ・クリ・オニグルミ・ツノハシバミ・チャボガヤ・ハイイヌガヤなど他の遺跡では残ることがない堅果類が豊富に出土しており、何れも現在も食料に供されているものであり、約半分は現在の民俗例でもみられるように衝撃によって半截(はんせつ)されているという。「下郷町史-第7巻通史編(発行・下郷町)」より出典(続く)